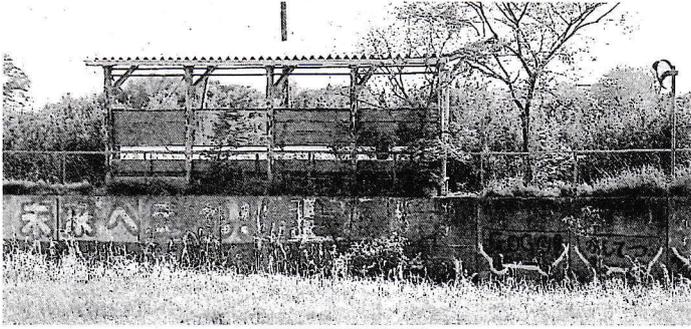


# 駅が消え 街は衰え増した

## 岐路に立つ ローカル線 @茨城



### 鹿島鉄道



「地元では、ここはまだ『駅前』と呼ぶんです」  
霞ヶ浦のすぐ北に位置する小美玉市の玉里地区。和洋菓子店「菓子工房nagai」を営む永井誠さん(76)は、目の前にある小さなバスロータリーを眺めながら、そう言っ

た。「ここは石岡、銚田の両市を結ぶ鹿島鉄道の常陸小川駅があった場所。利用客の減少で2007年に廃線となり、駅姿を消した。」  
戦後すぐの1947年に創業して以来、この地で店を構える。バブル期の90年代前半ごろまでは、数駅離れた工業団地で働く人や通学する高校生たちが朝夕に店をのぞき、うれしそうにお菓子を买买っていった。

30年ほど前からだ。マイカーが普及し出したせいか、通勤・通学客が減り始めた。今の小美玉市を構成する地域の人口は、2004年の5万4千人をピークに減少が続き、現在は4万7千人ほどだ。駅近くにあった県立小川高校は13年に閉校となった。「駅がなくなると、街の衰退は加速したかもしれない」

存続巡り温度差  
鹿島鉄道の年間乗客数は、ピーク時の1967年には300万人に達したが、2004年には84万人まで落ち込んでいた。  
廃線危機にあった頃、沿線にある中学・高校の生徒有志が「かしてつ応援団」を結成

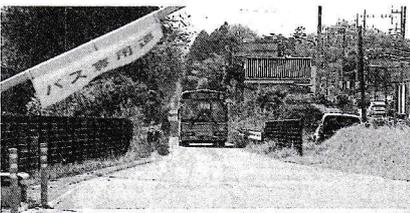
## 鹿島鉄道

1924年、鹿島参宮鉄道の27・28を結び、当初は鹿島神宮の参拝客輸送を視認に入れていた。乗客の減れ、廃線へとつながった。

①小川高校下駅があった場所。  
「未来へ走れ！鹿島鉄道」の文字が見える。小美玉市小川  
②運行していた当時の車両。2006年、行方不明

1924年、鹿島参宮鉄道の27・28を結び、当初は鹿島神宮の参拝客輸送を視認に入れていた。乗客の減れ、廃線へとつながった。

## 「地域全体で考えるべき 廃線後では遅い」



線路があった場所を整備した専用道走るバス=小美玉市栗又四ヶ

した。利用を促すため、車内への自転車の持ち込みを提案して実現させたり、路線の存続を訴える1万筆もの署名を集めたりもした。しかし、「廃線やむなし」と考える人たちの温度差は大きかった。

速輸送システム)が通っている。四箇村(小美玉市栗又四ヶ)―石岡の東西約5キロの区間で、途中からは並行して走る国道355号に乗り入れて旧常陸小川駅までの計7キロを運行している。

代替バス利用減  
鹿島鉄道の線路の跡地を利用して、今はBRT(バス高

10年に運行がスタートすると、利用者はいったん増加するが、人口減も相まって頭打ちに。新型コロナ禍で利用客はさらに減った。

「移動手段というハード面だけでなく、列車が走る原風景といったソフト面でも、鉄道の良さを地域全体で考えるべきだ。なくなってしまうから良さに気づいた、では遅いんです」  
(藤田大道、原田悠司)